
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 277

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5521. 今後の一時帰国前の旅行計画: 自己と関係性の変容
- 5522. 今朝方の夢
- 5523. 人と社会に資する研究に向けて
- 5524. 意識の流れとヒーリング
- 5525. 今朝方の夢
- 5526. 旅の計画と内外のリズム
- 5527. 身体を動かすことの喜びと大切さを教えてくれた今朝方の夢
- 5528. 今朝方の夢の続き: "path awareness" の作用や集団的トランス
- 5529. ユング博物館とエルヴィン・ラズローから受け継いだ古書
- 5530. 今朝方の夢
- 5531. 巨大な認知的ゲシュタルトの構築と超感覚的情報の通路の開拓
- 5532. 愚民政策の一環としてのオリンピック: 現象学の探究
- 5533. 今朝方の夢
- 5534. 人間である者とそうでない者に二分される格差
- 5535. 閉ざされた感覚の解放
- 5536. 今朝方の夢
- 5537. 無意識の世界の扉と過去未来の世界
- 5538. 時間と可能世界
- 5539. 今朝方の夢
- 5540. 幾何学と作曲

時刻は午前5時を迎えた。今朝は4時過ぎに起床し、起床してすぐにふと、「またルーブル美術館に足を運んでみよう」と思った。それは突然現れた思いであり、ルーブル美術館には実際にまた足を運んでみたいと思う。

今年の秋に一時帰国する際にはフィンランドで数泊前泊し、1日に飛行機に2回乗る疲労を軽減させたいと考えている。もちろん、フィンランドに訪れたい場所があるから前泊するわけなのだが、乗り継ぎによる疲労を軽減させるためという目的も確かにある。

今年は、シベリスが生涯の長きにわたって過ごした街アイノラに再度足を運び、前回の訪問の際には見過ごしていた美術館に足を運びたい。来年の秋に日本に一時帰国する際にはパリに前泊しようと思う。数日ほどパリに滞在し、その際にルーブル美術館に足を運びたい。

今書齋の本棚を確認したところ、4年前にルーブル美術館に訪れた際にはガイドブックを購入していなかったようなのだ。てっきりそれを購入していたと思っていたのだが、大英博物館やロンドン・ナショナル・ギャラリーのものしかなかった。次回ルーブル美術館に訪問した際にはぜひガイドブックを購入しよう。

ルーブル美術館には再度いくつか観たい絵画や古代の遺物がある。その時にパリを訪れる時には、昨年パリに滞在した時と同様に——この時にはルーブル美術館に行かなかったことを思い出す——、楽譜専門店のAriosoに立ち寄り、いくつか楽譜を購入したい。だが前回のように数十冊楽譜を購入してしまうと、そこから日本に行くことが大変になってしまうので注意が必要だ。楽譜の購入はほどほどにしよう。

今年の一時的帰国の際にはフィンランドに前泊し、来年はパリ、そして再来年はフランクフルトに前泊しようと思っている。フランクフルトにはまだ訪れたことがなく、ここでも数日かけて美術館や博物館などを周りたい。気が早いけど、その翌年にはロンドンに前泊する形で日本に一時帰国しようと思う。その際には、上述の大英博物館とロンドン・ナショナル・ギャラリーには再度足を運びたい。そのようなことを起床してすぐに考えていた。

昨日、自己を変容させることは、自己を取り巻く関係性を変容させることであると気付いた。言い換えると、関係性の意味付けを変容させると、自己は関係性の産物であるから自己が変容に導かれていくのではないかという気づきが芽生えたのである。

自己そのものを変容させていくことは非常に難しいが、自己を取り巻く関係性の意味付けであれば、内省的に関係性の意味を検証・再構築していくことはそれほど難しくない。これは自分に対しても行ってみたい実践であり、コーチングの際にも活用したい実践である。

昨日の午前中、一人一人が固有の絵画世界を持っているという気づきを得た。人は一人一人異なる言語世界を持っていて、言葉を発するたびに、あるいは文章を書くたびに、それは自らの言葉で絵画を描いているような情景が浮かび上がった。私たち一人一人が本質的に芸術家であるというのはそういうことなのだろう。

今日はこれから午前9時に向けて気温が下がっていく。今の気温は6度だが、ここから1度まで下がるらしい。そしてそこから昼に向かって徐々に気温が上がっていく。オランダらしく、奇妙な形で気温が動いていく。そんな中、今日も創造活動と読書に打ち込み、午後には街の中心部のオーガニックスーパーまでジョギングがてら買い物に出かける。

毎日必ず外の空気を吸い、体を少しでも動かすこと。大地と天から活動エネルギーを分け与えてもらうことが、今の自分の日々の活動を根底から支えている。フローニンゲン:2020/2/7(金)05:19

5522. 今朝方の夢

早朝の作曲実践を始める前に、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、外国の見慣れない公園の芝生の上にいた。そこには大学生ぐらいの外国人学生たちがたくさんいて、これから何かパフォーマンスか何かをするようだった。

1人のアフリカ系アメリカ人がすぐさまパフォーマンスを始め、他の学生たちはそれを見学していた。彼が始めたパフォーマンスは、歌と手品を組み合わせたものだった。厳密には、楽器を演奏しながら歌を歌い、尚且つ手品を披露するというものだった。彼の楽器演奏の巧みさには驚かされ、歌声

もまた良かった。最初のうちは楽器演奏と歌の方に力を入れているようであり、パフォーマンスの進行に合わせて徐々に手品の要素が入っていった。

私は最初から最後まで彼のパフォーマンスに目が釘付けになった。特にパフォーマンスの最後の方の手品が印象に残っている。彼が手からだけではなく、口からも色々なものを出し、スライム状の半液体物質が口から出され、それが手から次々に出されたコップに注がれていった。そしてなんと、注がれた半液体物質が、色鮮やかな種々のお茶に変わった。コップとお茶が放射線状に次々と現れた姿は圧巻であった。そしてそこから、彼は念力のような力を発揮し、観客として立っていた他の学生の周りの地面から次々と木々の芽を生えさせた。そしてそれは見る見るうちに立派な木になり、紅葉をつけた。赤く輝くその紅葉はとても美しかった。

パフォーマンスを見終えた後、私は彼らの学生寮に瞬間移動していた。外は夏のように暑く、寮の各部屋はクーラーが効いていた。私が瞬間移動した部屋は、男子学生が3人で1部屋を共有している形のものだった。偶然ながらそこに、小中高時代の友人(SS)がいて、彼は他の2人の外国人とそこで寮生活をしているようだった。彼と白人の欧米人の2人は勉強をしており、彼らは数学か物理のテキストを読んでいた。そしてもう1人のアフリカ系アメリカ人の学生は、勉強することをせず、自分の趣味に没頭していた。

その後、その彼が二段ベッドの上から下に降りてきて、部屋の冷蔵庫に向かった。そこには、友人の祖父が夜に楽しみに飲もうと思っていたビールがあったのだが、アフリカ系アメリカ人の彼はそれをお構いなしに飲み始めようとした。すると、友人は彼の行動に気づき、それをやめさせようとした。だが、アフリカ系アメリカ人の彼はそれを聞こうともせず、冷蔵庫から今度はバナナを取り出し、「ビールのお礼」と言って友人の方にそれを投げた。実際にはそのバナナも友人のものであり、友人は呆れ顔を浮かべながらも、仕方ないといった形でアフリカ系アメリカ人の学生の行動を受け入れていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面に関しては、あまり記憶に残っていない。私は実家において、睡眠から覚めたところのようだった。時刻は朝の5時ぐらいであり、いつもは両親もその時間帯には起きているのだが、その日は起きていないようだった。寝室を見ると、父がまだ布団にくるまっており、母の姿はどこにも見当たらなかった。すると、母は愛犬に食事を与えていたようであり、ダイニングルームの方から物音が

した。そちらに向かってみると、なぜかつい今この瞬間まで布団の中にいたはずの父もそこにいて、私に朝食を勧めてきた。時刻は朝食を摂るには早すぎであり、今はまだデトックスの時間だと思い、無理に朝食を摂るのはやめようと思った。フローニンゲン:2020/2/7(金)05:43

5523. 人と社会に資する研究に向けて

時刻は午後9時を迎えた。今日は1日を通して晴天であり、午後から日差しが強くなってくると、部屋の中も自ずから暖かくなった。

夕方には気分転換かつ買い物がてら街の中心部のオーガニックスーパーまでジョギングをした。その最中に改めて、人と社会に役に立つ研究がしたいと思った。今後の探究、特に博士論文でまとめ上げていくような研究は人と社会に資するものにしたいたいと強く思った。

意識、脳、音楽、治癒、変容の5つがキーワードとして浮かび上がり、それらが一つのネットワークを構成し、新たなゲシュタルト構造が生まれ始めたようだった。

以前より考えていたが、英語で執筆した博士論文をそのまま英語空間上で書籍として出版し、研究を通じて得た知見を世界に共有したい。博士課程に進むのは今すぐではないが、どこかのタイミングで再度学術機関の中で体系的な知識を積み上げていこうと思う。そしてその知識を、人と社会の治癒と変容の実践につなげていく。

現在、諸々の理論的知識から様々な実践トレーニングの案が生み出されており、それらを自分で試している。ふとした時に諸々の学術知識からトレーニング案が生まれ、それを口外することなくまずは自分で実践している。こうした方法論がより洗練されてくれば、いつか他者や社会に共有したいと思う。そのためには、引き続き日々学習を続けていく必要があり、自分を実験台にした実践を行う必要がある。そして、知識をより体系化かつ洗練化させていくために、博士課程に進学することも不可欠であるように思う。

夕食を作りながら、近々フローニンゲンの街の中心にある古書店Isisに立ち寄ろうと思った。店主のセオさんとは久方顔を合わせていない。以前セオさんの店に足を運んだのはいつだったのだろうか。半年ぐらいまえのことだったのだろうか。以前購入するか迷った何冊かの書籍がまだあるかを確認し、

それら以外にも、ヒーリング関係の書籍を探したい。また、人間の意識に関する書籍、特に心の哲学に関する書籍なども購入を検討しよう。

明日からは週末を迎える。明日と明後日も、平日と全く変わらずに作曲実践と読書に打ち込む。ただし、明日は先日まで行われていたオンラインゼミナールをもとにした教材を完成させたいと思う。編集が必要な箇所に編集をし、告知文のドラフトを作成し、できれば来週の木曜日あたりに共有を始めよう。

もう少しで就寝の時間に近づいている。今日からは気持ち早く就寝し、ベッドの上でヒーリングや身体意識の開発を行う。徹底的に身体をリラックスさせてからそれらの実践に取り掛かる。就寝前は自他ヒーリングの時間とし、自分なりに開発した意識と脳の可能性を開くトレーニングをする時間とする。それらの実践を行う鍵は、意識状態と脳の状態にある。フローニンゲン:2020/2/7(金)21:14

5524. 意識の流れとヒーリング

時刻は午前5時半に近づきつつある。今日は午前4時半過ぎに起床し、目覚めと共に心身の状態の良さを実感した。毎朝、心身の状態が良いという自覚を持てることはとても有り難く、調子の良さは日を追うごとに高まっていく。どうやら、調子の良さというのも自分の意識の力によって増幅することができるようだ。

昨日も時間がある時に、あれこれと雑多なことを考えていた。一つは、自分が日々作っている曲は、その瞬間の無意識の音の流れであるということだ。

心理学の領域を切り開いたウィリアム・ジェイムズがかつて「意識の流れ(stream of consciousness)」という概念を提唱したように、まさにこの概念が指摘する意識の流れを音として表現したものが自分の曲のようだ。またそもそも、意識の流れの中に音的な何かが存在していて、それを意識の流れから汲み取ることをしていると述べてもいいかもしれない。いずれにせよ、今日も自分の無意識と向き合い、それを覗き込むようにして、無意識の流れを音にしていく。

超心理学研究の分野で有名なラッセル・ターグの書籍を昨日読み終え、今日からは元ITP教授のウィリアム・ブラウドが執筆した“Distant Mental Influence: Its Contributions to Science, Healing, and

Human Interactions”を読み進めていく。本書は当該分野における名著であり、実際に中身の全体を眺めてみた時にそれを実感した。実証データも豊富にあり、良質な論文がいくつか統合されたような印象を与える良書である。

昨日ターグの書籍を読みながら、仏陀、イエス・キリスト、ムハンマドなどの偉大な宗教家の誰もが非常に優れたヒーラーであったという史実が興味深く思った。確かにこれまでも、キリスト教絵画を美術館などで眺める中で、イエスが優れたヒーリング能力を持っていたであろうことには気付いていたのだが、仏陀やムハンマドも同様の能力を持っていたことには気づけなかった。

そういえば、仏陀に関してもヒーリングをモチーフにした絵画作品が随分とあることを思い出した。そこからふと、以前協働者のある方から「加藤さんはヒーラーのようですね」と何気なく言われた言葉を思い出した。その時には別にヒーリングを提供していたわけでも、ヒーリングの話をしていただけでもないのだが、その方は私とのやり取りを通じてそのように思ったようであった。人は誰も多かれ少なかれ、ヒーリング能力を持っており、それを活性化及び開発するための方法論の探究をこれから行なっていきたいと思う。フローニンゲン:2020/2/8(土)05:41

5525. 今朝方の夢

ノーベル生理学・医学賞を受賞したジェラルド・エデルマンはかつて、「一つの体験は、それだけで脳の構造を変える」ということを述べていた。一つの体験が私たちの脳と意識に及ぼす影響の大きさについて思いを巡らせる。

今このようにして日記を執筆していること、そしてこれからドリームジャーナルを執筆すること、その後行う作曲実践や読書など、そうした体験の一つ一つが自分を変えていく。自分の脳と意識を変えていくそれらの一つ一つの体験を大事にしたい。

それでは今朝方の夢について振り返り、その後に早朝の作曲実践に取り掛かりたいと思う。夢の中で私は、どこかのサッカースタジアムの芝の上にいる。周りを見ると、国対抗の公式戦が行われているようであり、私は日本代表の一員としてピッチの上に立っているようだった。だが、私は肉体を持っておらず、純粋な意識だけがそこにあり、他の選手に助言や指示をあれこれと行う役割を担っていた。

対戦相手はアジアの他の国であり、おそらく中国か韓国だと思われる。相手の選手も味方の選手も顔が全く見えず、アジア人の雰囲気だけを私は察することができた。こちらの選手も誰が誰なのかがわからない状況であったが、それでもなんとか助言や指示を送り続けることができた。ある味方の選手が右サイドで他の選手とワンツーをして抜け出し、センタリングを上げた。それはなかなか良いセンタリングだったのだが、ゴールにはつながらなかった。

私は少し趣向を変えて今と同じような攻撃を試みることをその選手に伝えた。気がつくとは私はスタジアムのロッカールームにいて、そこで代表選手たちと話をしていた。その時にはもう誰が誰なのかがわかった。中でも私は、元日本代表のエースストライカーだった選手と話をしており、最近の調子を尋ねた。するとその選手は、移籍をしていた頃と比べると刺激が無くなってきており、それがプレーの質に影響を与えていると述べた。そして少し笑みを浮かべて、「最近ではメロディーを作っている」と述べた。「作曲ですか？」と尋ねると、どうやらそのようであり、私も日々作曲をしているため、その選手と話が合うと思った。

するとそこで場面が変わり、私は学校の教室にいた。そこは見慣れない学校であった。ただ雰囲気だけは、実際に私が通っていた小学校のように思えた。教室の真ん中の席は隣同士が全てひっついており、横に列をなしていた。他の机や椅子は後ろの方に片付けられていた。教室の真ん中の席の一つに、いや実際には机の上に、一人の年配の外国人が腰掛けていた。彼はメキシコ系のような顔立ちをしており、私は彼に話しかけてみた。

すると、彼は笑顔で私の方に振り向き、そこから少し言葉を交わした。どうやらその方も作曲をしているらしく、歌詞の入った曲を最近作ったとのことだった。そのため私は、ぜひその曲を聴かせて欲しいとお願いし、その場でその方に歌ってもらうことをお願いした。その方は少し照れ笑いを浮かべ、私にリズムを取ってくれとお願いしてきた。手拍子で私がリズムを取り始めると、リズムに合わせてその方が歌い始めた。

するとそこで、隣の席に若い外国人が現れ、私たちの歌を聴きながら、何やら英語か何かの問題を解いていた。どのような問題を解いているのか気になったので覗き込んでみると、そこで私の体が席につき、左隣にいたはずのその外国人は消え、その代わりに右隣に小中高時代の親友(NK)が

いた。机の上を見ると、理科の問題を私たちは解いているようだった。それはサンゴ礁の特徴に関する問題であった。

問題を解き終えて、その友人と解答用紙を交換し、お互いに採点をすることにした。すると、彼の横から別の友人(KM)が現れた。彼も問題を解いていたようなのだが、解答を交換できる人がいないようだった。ある特殊なサンゴ礁が海のどの辺りに生息していたのかを図示する問題において、私の図示が正しいのかどうか判断が難しいと親友が述べた。

すると横から、彼の隣にいた別の友人が口出しをしてきて、私の解答が誤っているとする方向に少しずつ持っていきこうとしていることに気づいた。それに対して私は、解答の解説と問題をもう一度読むことを彼らに促し、確かに自分の図示は解答集の図示と全く同じではないが、サンゴ礁の体が陸(岩の上)と海の双方にまたがっていることがポイントであることを彼らに説明し、自分の解答はそのポイントを外していないことを伝えた。最終的な判断は親友に任せると述べ、横から口出しをしてきた友人にはこれ以上口出しをしないように促した。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2020/2/8 (土)06:14

5526. 旅の計画と内外のリズム

起床直後、今日は風が強いことを実感した。起きてすぐに寝室と書斎の窓を開け、空気の入替えを試みたところ、強風が外の世界に吹いていることがわかった。天気予報を確認すると、今日は昼前から雨が降り始め、強い風が吹くとのことであった。明日からの1週間においても、雨マークが付されており、1日の中で断続的に雨が降る日が続く。今年は雪がほとんど降らず、気温が大して下がらない代わりに、雨が降る日が多い印象だ。

先日の日記で書き留めたように、エジプトに足を運ぶことは先延ばしにした。その時の日記では、ベルギーに行くことも先延ばしにしようと考えていたことを書き留めたいように思う。だが、今朝改めてそれについて自分の内側の声に耳を傾けてみた時に、どうやら自分はベルギーに行きたがっているような印象を受けた。前回の旅からすでに1ヶ月以上が経ち、仮に今月末にベルギーに行くのであれば、2ヶ月弱ほど時間が空いているので良いタイミングかもしれない。この2ヶ月の間に、随分

と読書や創造活動を続け、自分の中に蓄積されるべきものが蓄積されている印象だ。それを新たな次元で咀嚼するために、旅は良い刺激になるかもしれない。

今夜にでも、ベルギーの主要3都市で訪れたい場所があるかどうかを確認したい。とりわけ美術館や博物館を確認してみよう。また、チェコのプラハにも近々足を運んでみたいと思っている。プラハ市内にはいくつか訪れたい美術館があり、スメタナやドヴォルザークの博物館などもある。プラハについても色々と調べてみて、近い将来に足を運んでみよう。

ここ最近内外のリズムを意識して日々を過ごしている。クラニオセイクラル・バイオダイナミクスの実践の原理と同じく、日常生活において、様々な現象のリズムを感じている。それは自分の呼吸のリズムに始まり、季節のリズム、さらには金融市場のリズムなどにも及ぶ。そうしたリズムを敏感に察知し、それらのリズムに呼応するような形で日々を過ごしている。作曲においても自己を生命の大きな流れに委ねていく。その流れには固有のリズムがある。そのリズムを曲という形にしていこうと思う。

先週を振り返ってみると、クラニオの一連の書籍を読み通した。全ての書籍を合わせると、合計で3500ページぐらいあったように思う。改めて、クラニオの背景にある知識体系及び技術体系の堆積に驚いた。そこには、身体心理学や脳科学の膨大な知見が織り込まれている。さらには、トランスパーソナル心理学などの知見も盛り込まれている。その体系は顕教として書籍からある程度学ぶことはできるが、究極的にはそうした体系は実践を通して獲得される密教的なものなのだと思う。3500ページほど書籍を読んで思った素朴な事柄は、「やってみなければ何もわからず、何も身につかない」ということと、「とはいえ顕教的な体系を書物を通じてしっかりと学習していくことを蔑ろにすることもできない」ということだった。端的には、実践と理論的学習を積み重ねることの大切さを改めて思ったというだけなのだが、こうした気づきを定期的に得ることは重要なことのように思う。そうした気づきは、実践と学習に対する自分の姿勢を正してくれるのだから。フローニンゲン:2020/2/9(日)

06:32

5527. 身体を動かすことの喜びと大切さを教えてくれた今朝方の夢

今朝は幾分感動的な夢を見ていた。夢の中の光景が感動的だったというよりも、夢の中での行動が感動を呼び起こしたのだと思う。

夢の中で私は、アメフトの競技場にいた。私はスタンドではなく、実際にコートの上にいる。見ると自分の頭にはアメフトをするためのヘルメットのようなヘッドギアが取り付けられており、周りを見ると、顔のよく見えない選手たちが激しく動き回っていた。「どうやら私は、今アメフトの試合をしているらしい」そのようなことを思った。

私はアメフトをプレーしたこともなければルールもあまりわからない。そんな素人ながらも、周りの選手たちの動きからルールを類推し、自分なりに懸命にプレーしていた。すると、ある時間帯から要領を掴み、次々と得点を入れ始める自分がいた。その時に気づいたが、私はアメフトの動きというよりも、ラグビーの動きをしており、トライを重ねるような形で得点を次々と重ねていった。気がつけば、自分の独壇場になっており、相手チームとの得点差は、もはや埋めようのないものになっていた。そこでハーフタイムを告げるホイッスルが鳴った。

ロッカールームに引き上げる前に、選手入場用の入り口付近に監督が立っており、誰かと話をしていた。どうやらそれはこちらの選手の誰かのようだった。監督はその選手に、今の流れはとても良いからこの調子で行け、というようなことを述べており、その選手に励ましの言葉をかけていた。私はその場で立ち止まり、ロッカールームに引き上げる前に、競技場の雰囲気を変えて感じていた。

なんとも言えない熱気が競技場全体を包んでいた。そして自分の内側の感覚に意識を向けてみると、自分の身体全体の細胞がまるで喜びのダンスを踊っているかのように、全細胞が活性化されているのを感じたのである。それはもう生きることに伴う爆発的な喜びだった。身体を動かすことがこれほどまでに喜びをもたらすものであることを忘れていた自分がいたようだった。

前半を終えた段階で、私はもう自分の力を出し尽くしたような感覚があった。そして、野生的に身体を動かすことを通じて得られた生きることの原初的な喜びに浸っている自分がいたのである。私は監督から言われることもなく、自分からハーフタイムで交代しようと思っていた。監督は私が何も言わずともそれを察してくれたようであり、前半に積み重ねた大量得点の労をねぎらうかのように、後半からは私の代わりに他の選手が出場することになった。

実は私は、選手入場の入り口付近に立って生きる喜びを感じていた際に、感極まって涙を流していた。その涙が治まるまでに時間がかかり、ロッカールームに向かう道にはすでに選手たちが整列を

して、後半開始に向けて準備をしていた。私たちのチームはもう一度心を一つにするために一斉に声を出し、その後、監督からの励ましの言葉を聞いていた。私はそんな様子を眺めながらロッカールームに戻り、着替えをしようとした。

ロッカールームに到着すると、そこには若い選手たちが数名ほどいて、その他にもマネージャーらしき人が数名いた。私はマネージャーの一人から、チーム専用のウェアを手渡された。それは私の好みに合うようなデザインであり、嬉しく思った。日々の生活で使っている下のウェアが洗濯によって少し縮んでいたの、下のウェアを新しくもらえたことは嬉しかった。一応マネージャーの方に、このウェアは洗濯しても縮まないかを確認した。そこで夢の場面が変わった。

普段私はサッカーやバスケの夢をよくみるが、アメフトの夢を見たのは初めてのことだったかもしれない。そう言えば昨日は、現在進行している協働プロジェクトの準備として、アメフトのコーチに関する記事を読んでいた。来週の月曜日に、アメフトのコーチを招いた講演会が現在進行している協働プロジェクトのプログラムの一貫としてある。アメフトに関する記事を読んでいたことが、すぐさまその日の夜の夢に影響を与えたのだろう。それともう一つ、やはり今朝方の夢で感じられた生きる喜びを忘れることができない。あの爆発的な歓喜。全細胞が原初のダンスを嬉々として踊っているかのような感覚。その感覚と自己が究極的に合致し、自分はそのダンスの振動によって究極的な癒しと変容作用を得ているようだった。

それを思い出してみると、改めて食実践だけでは治癒や変容を実現するためには足りないと思わされた。身体を作ること、とりわけ運動を通じて身体意識を涵養していくことが大事であるという再度の認識。身体を実際に動かして身体意識を涵養することがなければ、脳の状態や意識状態を整えることや様々な状態を行き来することが困難になってしまう。

ここ最近の大量の読書を通じて、自他の治癒と変容を支えるためには、自らの脳や意識の状態を整えることが極めて重要であると再認識しており、その第一歩はシンプルに身体を用いた適度な運動なのだと思う。今日もまたいつものように、雨が降っていない時間を見極めて、外に出かけて身体を動かす。フローニンゲン:2020/2/9(日)07:04

時刻は午後9時を迎えた。今、強風と共に雨が降っている。今夜から明日の朝にかけて、この状態が続くそうだ。

就寝時間が迫ってきた今になって、今朝方の夢の続きを少しばかり思い出した。夢の中で私は、バスケットコートに立っていた。そこは実際に通っていた中学校の体育館であった。どうやら部活の最中のように、同じ学年同士で紅白戦のようなものを行っていた。しかしよくよくメンバーを見ると、他の学校の生徒が混じっていて、しかも他校の1学年上の先輩たちも何人かいた。

そんな中紅白戦を行っていると、試合はとても拮抗しており、程よい緊張感がコートの上にあった。試合の最後の最後までシーソーゲームであり、残り数分になったところで、私の放ったスリーポイントシュートが見事に決まったり、あり得ないジャンプ力を発揮してダンクシュートを決めたりと、終了間際に立て続けに得点を重ね、結果としてこちらのチームが勝利した。

今朝方はアメフトの夢に続いてバスケの夢を見ていたことになる。やはり自分にとって身体を動かすということは重要な意味を持っているようであり、夢の中の身体も運動を通じて調整を行っており、無意識の世界のダイナミズムを確保しているようだ。そしてそれが覚醒意識におけるグロスボディに活動エネルギーを供給している。そのような構図を見て取ることができる。

今日も読書と作曲実践に明け暮れる1日だった。本当に朝から晩までそれらのことしか行っていない。1週間のうちに、数時間ほど協働プロジェクトの関係の仕事があるだけであり、自分で進める探究や実践と協働のバランスが取れていてとても良い状態だと思う。

様々な領域の書籍を読む中で、超心理学関係の書籍を現在大量に読み進めているのは、ひょっとしたら近いうちに、超心理学の研究対象となっている体験をより鮮明にするからではないかと思われた。そうした体験に出会った際に、そこで驚くことなく体験を通過していくための準備として知識を得ているようなのだ。これまで幾種類もの知覚体験をしてきているのだから、これ以上驚くようなものはもう残されていないようにも思われるが、自分の無意識は念には念を、今の自分の理解を超えた体験が残されている場合に備えて着実に準備をしているようだ。

今日はフィンランド人の物理学者が執筆したレイキと量子力学に関する書籍、スタニスラフ・グロフが執筆した書籍を読み終え、現在はアーノルド・ミンデルが執筆した“Earth Based Psychology: Path Awareness from the Teachings of Don Juan, Richard Feynman, and Lao Tse”を読み進めている。本書の中でミンデルは、“path awareness”という概念を提唱しており、私はその意識に従って曲を作っていることに気づかされた。それは、数日前に無意識の流れに任せて音を生み出すと述べていたことと重なる。

私たちの意識には否応なしにある方向に向かわせる力が備わっており、それが身体や思考を方向付けていく。作曲においてもそうした働きが顕現しており、この作用を意識しながら明日からも作曲実践をしていきたい。

今日はアメリカの書店から、催眠に関する学術書“The Hypnotic Brain: Hypnotherapy and Social Communication”が届き、イギリスの書店からはアントン・ウェバーンの音楽に関する学術書“The Twelve-Note Music of Anton Webern: Old Forms in a New Language”が届いた。前者に関して言えば、現在の私の関心事項は、日本は間違いなくオリンピックを開催するにあたって多かれ少なかれ集団的トランス状態になり、それが下手をすると集合的なトラウマにつながりうるということを危惧している。そうした可能性を帯びた社会問題を考察する際に、この書籍は有益だろうと思われる。フーニンゲン:2020/2/9(日)21:18

5529. ユング博物館とエルヴィン・ラズローから受け継いだ古書

時刻は午前6時を迎えようとしている。今朝の起床は午前5時であり、比較的ゆったりとした起床だった。良質な睡眠を取り、今日もまた自分の取り組みに励むだけの活動エネルギーが朝から満ちている。

今日はどうやら満月のようにあり、闇の空の彼方に輝く満月を見ることができる。その前を早い速度で雲が通り過ぎていく。昨日と同様に、今日もまた風が強い。午前中から昼頃まで雨が降るようだが、午後は一時的に雨が止むとのことである。そのタイミングを見計って、ジョギングがてら近所のスーパーに買い物に出かけよう。

ここ最近では、色々とシンクロシティのような形で自分を取り巻く諸々の物事が結びつきあっている。そこでふと、シンクロシティという概念を提唱したユングについて気になり、彼の博物館がチューリッヒ郊外にあることを知ったので、今度チューリッヒを訪れた際にぜひ足を運んでみたいと思った。

どういうわけだが私は、様々な分野で偉業を成し遂げ、人類に少なからず貢献を果たした人間に関心を持ち、彼らが活動をした場所や彼らの博物館を訪れることをしている。ユングと同じく心理学領域で言えば、過去にはウィーンでフロイト博物館に行き、ピアジェが生まれたスイスのニューシャテルにも足を運んだ。そこで今度はユングである。チューリッヒにはその他にも興味深い博物館や美術館があるようなので、今度の旅のリストに加えようと思う。

私は普段、読みたい書籍が見つかる都度、それをリストに加え、しかるべきタイミングで購入している。書籍のリストと同じように、足を運びたい場所も着実に旅リストに加えられていく。チューリッヒを訪れるのは今年ではないかもしれないが、少なくとも昨日リストに加えたチェコのプラハには春過ぎか秋にでも訪れたい。プラハでは各種の美術館に加え、スメタナとドヴォルザークの博物館には必ず足を運ぶ。

昨日ふと、あるシンクロシティについて思い出し、それについて考えていた。今から数年前にハンガリーのブダペストを訪れた際に、私は街の古書店兼カフェに立ち寄った。そこでコーヒーを注文し、注文を待っている間に壁に埋め尽くされた古書を眺めていた。そこでふと手に取った一冊が、偶然ながら統合理論の確立に際してケン・ウィルバーと並んで多大な貢献を果たしたエルヴィン・ラズローが所蔵していたものだった。その書籍は、ロシアの科学者が執筆したシステム科学に関する分厚い解説書であり、その科学者がラズローに献本したことが最初のページのサインからわかった。ラズローは何らかの理由でそれを手放し、それが何の縁か私の手元にやってきたのである。その書籍の内容そのものに惹かれるものがあったため、もちろん私はその古書を購入した。だがそれ以上の理由として、その科学者からラズローに引き渡された叡智をラズローから引き継いだ感覚が自分の中にあり、その縁に感慨深いものがあったことも大切な理由だ。

昨日はその出来事について思い出していた。その書籍が自分の手元にやってきたは本当に大きな偶然だったと思う。しかもそれがあのラズローがかつて所有していたものであったことも大きな偶

然である。その書籍をまた近々読み返してみよう。その際にもきっと、何かの偶然でまた新たな発見があるに違いない。フローニンゲン:2020/2/10(月)06:10

5530. 今朝方の夢

強風が過ぎ去っていく。だがその強風は見ることはできない。木々の揺れや風の音を通じて、それが確かに存在しているのだと知ることができる。目には見えないが確かに存在するもの。それは数限りなく存在している。それを忘れないようにしたい。そこに大切な事柄が隠されている。それは隠されているようでいて、絶えず私たちの目の前に開示されているのだ。

断片的ではあるが、今朝方の夢を少々覚えている。夢の中で私は、実際に通っていた小学校のグラウンドの上にいる。そこで今から400m走のタイムの測定が行われることになっていた。距離として400mは最初から全力で走ると後半は随分とバテてしまう。そうした懸念はあったが、私は最初から全力で走ろうと考えていた。

スタート地点に着くと、ピストルを鳴らす役割の先生が、スタートの仕方について説明してくれた。以前までは横一列で一斉にスタートしていたようなのだが、今回からはクラウチングスタートで、しかもお互いの距離をずらしてスタートすることになった。数回ほど練習をする時間があり、練習の際にも先生は足の運び方などを私たちに教えてくれた。それが的を得ていたようであり、その方法でスタートをすれば、随分と出だしが良い感覚があった。

今からタイムと一緒に測定するのは、何人かの友人たちだった(NK&SI&YU)。いざスタート地点に着いて視線をふと前方にやると、校舎の前に、部門は違うのだが、前職時代にお世話になっていた方が立っていた。その方は私たちのレースに関心があるようだった。そしてピストルが鳴り、スタートを切ると、スタートは非常に順調であり、私はそのままの勢いで後半までやってきた。最後まで親友(NK)と首位を競っており、結果としては彼が私よりも一歩早くゴール地点に辿り着いた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はどこかの旅館の大浴場の更衣室にいた。実際にはその前に、旅館の受付でのチェックインがあったのを覚えている。受付は2つあり、混んでいない方の受付でチェックインを済ませた。その時対応してくれたのは中年の男性だった。

部屋に戻るよりも先に大浴場に向かった私は、荷物は更衣室のロッカーに預けようと思った。そこで早速着替えを始めると、小中学校時代の親友(HS)が隣にいて、私に話しかけてきた。すると親友は、私の乳首を指差して、「あれ？どこに行ったの？」と述べた。それに対して私は、「あれは抜け落ちてしまった」と述べた。友人が指を指して指摘していたのは、私の右乳首にあった長い毛であり、それは先日何かの偶然で抜け落ちてしまったことを彼に伝えた。すると彼は少し残念そうな表情を浮かべて、「そんなこともあるんだね」と述べた。

その後、彼は大浴場の扉の方に向かってゆっくりと歩いて行った。私は彼の背中を見ながら、「よく覚えていたな」と思った。そこで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、高校時代の友人(TN)と異国の地のある街の家の一室で、一緒に本を読んでいた。私が収集してきた様々な書籍の中から彼の関心に合うものを勧め、それをもとに話をしていた。話の最後に、科学的探究の奥深さと尊さについて彼に語り、感極まるものがあった。込み上げてくるものを感じていると目が覚めた。

昨日の夢の中ではアメフトとバスケを行い、今朝方の夢の中では陸上をしていた。現実世界においてはもう激しい運動はしておらず、毎日朝のヨガと午後のジョギング程度を行っているだけだが、夢の中ではいつも激しい運動を行っている自分がいる。現実世界の自分の代わりにそれを行ってくれているのか、それとも自分の無意識は激しい運動を欲しているのだろうか。今はただ、そうした激しい運動に充てるエネルギーを知的活動に全て振り向けている。そこで激しい思考運動を行うようにすればいいのではないかと思っているが、もしかすると、もう少し強度の高い運動を取り入れてもいいかもしれない。あるいは、知的活動のギアをさらに上げることも考慮に入れたい。フローニンゲン:2020/2/10(月)06:37

5531. 巨大な認知的ゲシュタルトの構築と超感覚的情報の通路の開拓

今、また少し雨が降り始めた。今日は特に午前中に激しい風を伴った雨が降っており、夕方あたりは雨が止んでいた。

時刻は午後7時を迎え、今日もゆっくりと終わりに向かっている。今日は午前中に協働プロジェクト関係のミーティングが一件あり、それ以外の時間は全て作曲実践と読書に充てていた。現在読み

進めている書籍の対象領域は多岐に渡っているが、どうやらそれらの領域の知識が一つの巨大な認知的ゲシュタルトを構築し始めているように感じる。それは、目には見えない意識空間内に構築されていく建築物のようであり、今の自分はそれを少しずつ大きなものとして建築している最中のようだ。その設計図は私の手元になく、完成物がどのようなものかはわからないが、そうした構築物を確かに作っているという実感だけがある。そして、それを構築するために時間がゆっくりと流れていく。現在建築中の構築物が一応の完成を迎えた後に、それがどのような構築物となって目の前に現れるのか、そしてそこからさらに新しくどのような構築物を作ろうとするのか。それは全く未知である。

午後に作曲実践をして少し休憩をしていた時に、どうやら自分は、何の批判をすることもせず、何の批判を受けることもせずに内側の奥深くにある感覚情報を曲の形にすることを通じて、そうした情報の通路をより明瞭なものにし、内奥のないしは自己を超えた感覚情報を得る力を高めようとしているのだと気づいた。それは多分に現代社会で封印・抑圧されている類の力である。様々な心理学者や物理学者の発言を見ていると、超感覚的情報が貯蔵されている場がどうやら存在しているようで、自分は今、作曲を通じてその通路を開拓しているようだ。

今日は不思議な組み合わせの読書を行っていた。一つは、米国の伝説的な超能力者であるインゴ・スワンの書籍“Everybody’s Guide to Natural ESP: Unlocking the Extrasensory Power of Your Mind”と、ケンブリッジ大学出版から出版された現代の現象学の知見が収められた論文選集の“The Oxford Handbook of Contemporary Phenomenology”というものである。前者は間違いなくニューエイジ系の書籍に分類されるであろうし、後者はその道の生粋の学者しか読まない書籍に分類されるだろう。そうした対極的な位置にある書籍を今日は読み進めていた。後者の書籍に関しては如何せん分量があり、初読が終わるのは明日になるだろうか。

ここ最近では、毎日次から次へと食べるように書籍を読んでいる。相変わらず食事は質素極まりないが、それとは対照的に、読書に関してはその摂取量が極めて多い。ここ最近注文した50冊ほどの書籍もほとんど一読が済んでおり、来月購入予定の書籍リストがまた50冊ほどになっている。来月は、ここからふるいに掛けて30冊ぐらい購入しようと思う。

今年の8月で、欧米での生活も9年目となる。8年目の生活の終わりにこうした集中的な読書を行っていることには何か大切な意味があるのだろう。それはきっと、自分がこの世界で果たす役割につながっているはずだ。

雨が天から滴り落ちている。その一滴一滴と同じく、毎日自分は先人たちの叡智が宿る場から叡智の欠片の一片一片を受け取っている。明日もまた固有の輝きを持つ1日になるはずだ。世界はどのように告げているし、自分の内側もそのように告げている。フローニンゲン:2020/2/10(月)19:28

5532. 愚民政策の一環としてのオリンピック:現象学の探究

時刻は午前5時を迎えた。今朝は4時過ぎに目覚め、起床と共に心身の状態の良さを実感した。目覚めてからすぐに活動に乗り出していけるほどのエネルギーに満ちている自分がいる。毎朝この感覚を実感できることの有り難さを思う。

数日前から、これまで以上に気持ち早めに就寝するようにしている。寝室に早めに移動し、ベッドの上でリラックス法や呼吸法、そして様々なヒーリング技術を試している。ここ最近より一層睡眠の質が高まっているのは、おそらくそうした実践の影響かもしれない。これはとても良い影響である。超感覚的な情報を受け取る通路を開拓する実践及び意識付けも日々深まっている印象を受ける。

欧州での滞在5年目、つまり欧米での9年目の生活に入る時期は、ちょうど日本でオリンピックが開かれるタイミングにあたる。先日、オリンピック開催にあたって、日本が集団的トランス状態に陥り、そこから日常の意識に戻ってくるに際して、その戻り方を誤ると、集団的トラウマを生み出すことになるのではないかと考えていたことを書き留めていたように思う。

改めて考えてみると、様々な意識状態について理解をし、そうした意識状態を行き来する鍛錬を多くの人は行っていないのであるから、戻り方云々の話は最初から当てはまらず、今回のオリンピック開催は多分に集団的トラウマを生み出すリスクが高いのではないかと思う。いやそもそも、こうした国際的なフェスティバルというのは、私たちの目には見えない背後に巧妙な意図と仕掛けがなされており、オリンピックの開催を喜んでいるのは無知な人間だけなのかもしれない。

古代ローマ時代に活躍していた詩人ユウェナリスはかつて、「パンとサーカスで市民は盲目になる」と述べていたことを思い出す。ユウェナリスは、古代ローマ社会で蔓延していた愚民政策に対する警句としてその言葉を発した。

私たちの目には見えないところにいる権力者が提供する「パン(食べ物)」と「サーカス(娯楽)」によって、人々はいとも簡単に政治経済的な盲目になる。今回のオリンピックもそうした一種のように思えてくるのは私だけだろうか。今年は、オリンピックが終わり、秋口に一時帰国する予定なので、日本国民がオリンピックを経ていかような精神状態に陥ったのかをこの目で確認することができるだろう。

今日も昨日に引き続き、現象学に関する先端的な研究結果が収められた“The Oxford Handbook of Contemporary Phenomenology”を読み進めていく。本書は600ページほどの分量だが、オックスフォード大学出版の論文選集には時折1000ページを超すものがある。近日中に届くシリーズの中には何冊かそれくらいの分量があるものがあつたかと記憶している。

いずれにせよ、本書を昨日から読み始めて気づいたのは、自分が思っていた以上に現象学の研究もかなり先に進んでいるということだった。哲学や心理学の他の領域の進展に応じて、現象学の研究もそれらの領域の新たな知見を取り入れながら発展を続けているという印象を受けた。本書はオックスフォード大学出版の他の書籍と同様に、非常に読み応えがあるので、今日も時間を掛けて読み進めていこう。フローニンゲン:2020/2/11(火)05:20

5533. 今朝方の夢

今朝も目覚めたら強風が吹いていた。今もまだ強風が闇の世界を駆け巡っている。

今日は午後に少しばかり雨がパラつく程度のようなので、夕方には軽くジョギングに出かけることができるだろう。今年の冬は本当に暖かく、気温がマイナスになることがほとんどなく、毎日外に出かけることが苦もなく行うことができている。20～30分ほど軽くジョギングをしたりウォーキングをしたりすることが非常に良い気分転換となり、何よりも室内では得られないようなエネルギーを外界世界との接触を通じて得ることができているように思う。

身体がなまると精神がなまる。精神がなまると全てがなまる。すると日々が腐敗する。そのようなことをふと思った。

それではいつものように今朝方の夢について振り返り、その後、早朝の作曲実践に取り掛かりたい。今日は協働プロジェクト関係の仕事がないので、午前5時から午後9時半までは自分の取り組みたいことだけに取り組むことができるだろう。

夢に関する振り返りは、先日から読み進めているアーノルド・ミンデルの理論やエクササイズをもとにして、もう少し工夫を施してみてもいいかもしれない。この点についてはもう少し考えを巡らし、試してみたいことが生まれたらそれを試そう。

夢の中で私は、一軒家の見慣れない一室にいた。その部屋には木で出来たベッドが置かれており、それは白い壁に密着する形で置かれていて、壁には窓があった。私の周りには、大学時代のゼミの友人たちがいて、そこで談笑をしていた。友人の一人(TA)がふと、ベッド脇のコンセントの周りに骸骨のおもちゃを貼り付け始めた。それは骸骨の形をした蛍光色を発するパネルだった。それをペタペタといくつも貼り付けたところで部屋の電気を消すと、骸骨が悲鳴を上げて、友人の一人(FK)がびっくり仰天していた。私もそれが不気味に思った。

それらの骸骨のパネルは何分かおきに定期的に悲鳴を上げるらしい。そのようなものをベッド脇に置いていたら安眠できないな、と私は思った。そこで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私は会議室のような場所にいた。

いくつかの長机を連結して、一つの大きな長方形を作り、それぞれの席には友人たちが座っていた。今から何かについて勉強会のようなものがあるらしく、最初に一人一人の自己紹介を行うことになった。高校時代の友人が自己紹介の冒頭でいきなり一発ギャグを披露し、そこから自己紹介を始めた。彼はそうしたことを行う人物ではなく、私は彼の行動に驚いた。

幸いにも、彼の一発ギャグは成功したようであり、その場にいた全員が彼の話に引き込まれているようだった。ちょうどその次が私の番であり、自分も一発ギャグを冒頭でしなければならぬ雰囲気は辺りに漂っているのを察した。そこで私も一発ギャグを披露してみた。最初私は失敗に終わったかと思ったが、意外にもジワジワと効く笑いをもたらすものだったらしく、その試みは成功したのだと

思った。すると、この勉強会を取りまとめている人が、「期待していた通りでした。この勉強会での自己紹介では、最初に必ず笑いがなければなりません」と述べた。とりあえず自分の紹介を終えて安堵感に浸っていると夢から覚めた。フローニンゲン:2020/2/11(火)05:44

5534. 人間である者とそうでない者に二分される格差

つい今し方、テレビを見ることやスマホをいじることは愚民への道であり、逆に言えば、愚民政策を推し進める上では、テレビを見させること、スマホをいじらせることが鍵を握るのだらうという考えが芽生えた。

先ほどの日記の中で、古代ローマ時代に活躍していた詩人ユウェナリスがかつて述べた、「パンとサーカスで市民は盲目になる」という言葉を引用していたように思う。現代においては、娯楽としてのサーカスはテレビやスマホに該当するのだらう。

日本に一時帰国し、とりわけ大都市で列車に乗ると、乗客たちが異常なほどにスマホに釘付けになっていることに戦慄を覚えることがある。はたから見るとそれは非常に奇妙な光景なのだが、その光景を作り出している当人たちはその異常な行動に気づいていないようなのだ。

人間が人間ではなくなっていく社会の到来。それはもう随分と前にやって来ており、その傾向は加速しているようだ。

現在の日本において、経済的な格差以上に恐ろしいのは、人間である者とそうではなくなってしまった者に二分される格差のように思えてくる。片方は人間であることをなんとか保ち、もう一方は知性と魂を抜き取られたゾンビ的な存在に成り果てる。

毎年日本に一時帰国して思うのは、この格差はすでに顕在しており、その格差は経済的な格差以上に早い速度で広がっているのではないかということだ。一時帰国している最中に、街にある店で店員の人たちと話をすると、大抵はその人と人間同士の会話が成り立っており、それには心底安堵感を覚える。一方で、時折人間ではなくゾンビと会話をしていると思う出来事に直面することもある。

厳密には、ゾンビと化した人間とは視線が合わず、会話は成り立たない。一応日本語らしきものが短く交わされるだけである。

現代社会はサイコパスやソシオパスの拡大だけではなく、ゾンビと化した人間の拡大とも向き合っていかなければならなくなっているようなのだ。おそらくこの問題は日本だけに当てはまるものではないだろうが、日本の都会はかなり状況が悪い。

欧州で生活を始めてから様々な国を巡っており、どこの国にも悪人や愚民はいるが、市民のゾンビ化に関して日本ほど問題が進展している国を見たことはない。この問題に対する自分なりの取り組みの方向性は見えており、小さいながらも自分にできることを日々行っている。その取り組みをこれからも続けていこう。

ここ最近では、自己と世界を俯瞰的に眺める意識状態が続いている。いや、それは日を追うごとに深まっている。この4年間、それは日々深まり続けていた。そして、今もなおそれは深まりを続けている。こうした意識状態が深まっていくことによって、自己及び世界に関して、また新しい認識が生まれてくるだろう。今日もまた、必ず新しい認識が生まれ、認識世界が拡張されていくはずだ。フローニンゲン:2020/2/11(火)06:12

5535. 閉ざされた感覚の解放

1日の始まりと同じように、今日もまた静かに1日が終わりを迎えようとしている。ここ数日間は強風が吹いており、それに断続的に雨が降っている。

毎年気候の様子は異なるが、今年もまた独特な表情を見せている。早いもので2月も折り返しに近づいて来た。1年を通して、2月は一番日数が短いこともまた、時の流れの速さを感じさせてくれるのだろうか。

今朝方に書き留めていたことを改めて思い出すと、どのような情報に日々触れるのかの選択をより厳密にしていこうと思った。端的には、生命力に溢れる質の良い食材を口にするようにしているのと同じように、情報の摂取に関しても、生命力に溢れ、なおかつ密度の濃い情報を取り入れるようにする。そうした基準とは逆の情報には触れないようにする。さもないと、身体が腐ってしまうのと同

じく脳が腐ってしまう。そしてそれは意識を腐らせる。最後まで生きた血を持つ人間として生きていこうという気概。それだけが頼りの綱である。

今日も旺盛に読書に励んだ。午後には嬉しいことに、イギリスの書店から大量に書籍が届いた。まとめて多くの本が同じ書店から届けられたため、同一の箱に書籍が入れられており、箱には“Heavy Box”の貼り紙が貼られていた。

本日読み進めていた書籍を通じて、音楽は左右の脳を無意識的に結合させて働かせる力を持っていることがわかり、それは自分の日々の作曲実践を通じて実感していることでもあったので納得がいった。

自分がどうして今から3年前に作曲実践を始めたのか。今、少しずつではあるが、その意味の表皮が剥がれて来た。ようやくその意味が掴めて来たのである。ザルツブルグのザルツァハ川を架ける橋を渡った先でのあの啓示的な体験を忘れることはできない。

超感覚的世界に参入するために作曲実践が自分に降って来たということ。自分が作曲を選んだのではなく、作曲が自分を選んだということ。そして、そもそも作曲が自分を選んだ背景には、さらに奥底に別の意味があるということ。それがもうわかる。ただし今は、その意味が指していることのさらにもう一段深いところにある意味が何なのかがわからない。いずれにせよ今の自分にできることは、作曲実践を通じて、この現代社会で抑圧され、閉ざされた人間としての、否、動物としての本源的な感覚を開くことである。その感覚を解き放つ時、また見えてくることがあるだろう。

ここ最近では、本当に自分の脳が別様に働き始めているのを実感する。そしてそれに伴って、身体感覚も変容し、それはこれまでには得ることのできなかつた諸々の情報、あるいは叡智を自分にもたらしてくれている。まるで自分は、叡智を司る場との受信装置のような役割を担っているかのようだ。

今、私は自分のことを「受信装置」と喩えたが、今日の夕方ふと、これからより一層、メタファー思考を働かせながらこの世界及び自己を眺めてみようと思った。それが早速現れる形で自分を受信装置に喩えた。こうした自分はまるで、呪文を覚えたての魔法使いの小僧のようである、とまた自分を喩えてみる。

深海のような闇の世界が窓の外に広がっている。今日の入浴中に、地球外の宇宙空間と比較する形で地球内の深海について思いを馳せていた。

湯船に顔をつけて息を止めてみる遊びをこのところ毎日行っているのだが、人間とは本当に脆弱な生き物である。空気がないとすぐに死んでしまうのだから。

湯船から顔を上げた時に感じる生きている実感。そして呼吸を止めることがもたらす変性意識。呼吸を止めることを遊びと書いたが、実際にはそれは意図的な実験及び実践である。ヨガ行者が行う種々の呼吸法の一つに呼吸を止める呼吸法があるのだ。遊びではなく、その効果を検証していることは述べる必要もないことだったのかもしれない。

私たちが今この瞬間に目に見えていること・知っていることなど本当にちっぽけなものである。このリアリティには、今私たちを取り巻いている充満した空気のように、見えないこと・知らないことが充満しているのだ。そしてそれらは、本当は気づいて欲しいのだが、恥ずかしがって両手で顔を覆っている。フローニンゲン:2020/2/11(火)19:46

5536. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今朝も強風が吹いており、強い風が吹くのはこれで3日連続である。天気予報を確認すると、どうやら明日は風が治まるようだ。今年は本当に気温がそれほどまで下がらず、気温に関しては過ごしやすい冬である。一方で、今年は例年以上に雨が多い印象だ。ほぼ毎日どこかの時間帯には雨が降っている。今日もそうだ。

これから1週間は金曜日を除けば、どの日も雨マークが付されている。今、あられのような雨が降って来て、書斎の窓ガラスに弾けるようにしてぶつかっている。街灯に照らされた箇所においては、大きな雨粒が目ではっきりと確認することができる。

今朝方の夢。それは自分を少しばかり揺さぶるようなものだった。

夢の中で私は、実家の目の前の海岸に似た砂浜の上に立っていた。見ると、近くには両親と母方の祖母がいた。どうやら私たちは、一緒に釣りを楽しんでいるらしかった。今回の釣りの対象はイワ

シであった。父は釣りの名人であるから、最初私は父にイワシの釣り方について教えてもらっていた。実際に釣りをしていたのは父と私であり、母と祖母は傍らで見守っていた。

父が最初の一投を投げると、竿にすぐさま反応があった。竿のしなり具合からそのイワシは大きいことが予想された。イワシ以外の魚の可能性もなくなかったが、竿から伝わる振動を通じて、それがイワシであることは間違いないと父が述べていた。波打ち際に魚を引き揚げてみると、それは確かにイワシであった。しかもそれはとても立派なイワシであり、小魚というよりも中型の魚であると言った方が正確であった。

父はすぐさまイワシの口からルアーを外そうとした。ところが、どうやらそのイワシはルアーを喉の奥まで飲み込んでしまっているようであり、さすがの父もルアーの取り外しに苦戦をしていた。そして、無事にルアーを取り外すことができると、父はなぜだかそのイワシをリリースした。せっかくの大物だっただけにもったいないと思ったが、父には何かの意図があるのだろうと察した。

だが、リリースされたはずのイワシは元気がなく、やはり喉の奥にルアーが刺さっていたことが影響してか、見る見るうちに海底に沈んでいってしまい、結局息を引き取った。すると、母と祖母が近くにやって来て、「また次の魚を釣ればいいわよ」と声を掛けて来た。それに対して父はうなづき、3人は笑顔で少し場所を変えるために歩き始めた。そこで私は立ち止まり、3人を大きな声で呼び止めた。

私:「てめえらちょっと待て。魚の命を大切にできないヤツらとは一緒に釣りなんてできない。死生観が違いすぎる」

私がそのように述べると、3人は驚いた表情を浮かべていた。私には、彼らが生き物の命を粗末に扱いすぎているように思えたのである。「お前らがあの魚の命をあのように扱ったのと同じように、俺もお前らの命を同じように扱ってやろうか」と言いたかったが、その言葉を口にするのはグッと堪えて、私は3人に背を向けて、砂浜を後にした。

次の夢の場面では、私は空港にいた。そこはどうやらマルタの空港のようであった。ただし、実際のマルタの空港とは違って面積がさらに広く、施設の数も多かった。私はこれからどこかの離島に向かうことになっており、ボーディングの時間が迫って来ていた。少し急いで搭乗口に向かおうと空港

内を歩いていると、この空港がやたらと広く、そしてやたらと入り組んだ作りになっていることに気づいた。「これはまずいな」と思った。それぐらいに空港内が複雑であったから、すぐに搭乗口に辿り着くのは難しいと思ったのである。案の定、空港内で迷ってしまい、にっちもさっちもいかなくなってしまう。すると、近くに小中高時代の親友(SI)と高校時代の友人(SK)がいたので、私は彼らに話しかけた。

彼らに話しかけた瞬間に身体が瞬間移動して、私たちは緑豊かな大きな街路樹が植えられた道の上にあった。立派な街路樹は私たちの背よりもうんと高く、太陽の強い光が当たらないように遮ってくれていた。雰囲気から察するに、夏のような感じだった。汗ばむほどではなかったが、私たちは半袖であった。

すると、親友が突然走り始めた。そして、突然彼の目の前に自転車が現れ、自転車に乗ってどこかに行ってしまった。見ると、サイクリング部の人たちと一緒に部活をするつもりだったようだ。そこで私は高校時代の友人に、「うちの高校にサイクリング部なんてあった？」と尋ねると、「いや、なかったよね」と彼は答えた。しかし、親友の彼は確かにサイクリング部の連中と一緒にどこかに行ってしまったことは確かだった。

せつかくこれから3人で少し話をしようと思っていただけに、親友の彼がどこかに行ってしまったことは残念であった。歩道橋の上を楽しそうに自転車を漕ぐ彼の姿を見たところで、再び私の意識は空港に戻って来た。

ハッとすると、私は空港のエレベーターの前にいた。そこで上の階に行こうと思ってボタンを押すと、またしても私の意識はどこかに瞬間移動した。すると、最初の夢の場面で出て来た海岸とは少し違う、どこか外国の国の海岸にいた。厳密には、私は砂浜の上にはいたのではなく、海岸を見下ろす山の上にあった。直感的に、そこはマルタ共和国だと気づいたのは、山の上から海岸をしばらく眺めた後のことだった。

山頂からの眺めを楽しんでいると、突然、海岸の方からマシンガンや大砲の音が聞こえて来た。見ると、イギリス海軍がマルタを占領にやっけて来たようであり、イギリスの艦隊が陸に向かって攻撃を仕掛け、それに対してマルタの軍が応戦をしているようだった。その様子を見て、最初私はイギリス海

軍の分が悪いと思っていたのだが、しばらくすると、形勢が逆転したようだった。「このままではマルタはイギリスに屈してしまい、イギリス軍が陸に上がって来てしまう」と思った。そう思った私は、先ほど街路樹の下で話をしていた友人が横にいたので、彼と一緒に一刻も早くこの場を去ろうと思った。同じようなことを考えている人たちが周りにはたくさんいて、その場にいた人たちは一斉にさらに奥の山の方に逃げ始めた。

走り出した瞬間に、私の意識は再び空港の中にあった。そこで私は、先ほどの山とこの空港は近くにあることに気づいたのである。先ほどの銃撃戦とは打って変わって、空港内の雰囲気は平和であった。空港にいる人たちは、外の世界で何が起きているのか全くわかっていない様子だった。

私は外の世界で何が起きているのを知りながらも冷静になることを務め、早くこの国から脱出しようと思った。だが、相変わらず搭乗口がどこにあるかわからず、引き続き私は空港内を彷徨っていた。すると、先ほどのエレベーターの前にやって来て、どうやらこの先に搭乗口があるらしいぞと思った。2階に上がってみると、マルタ航空のカウンターがあり、どうやら搭乗口は近いことがわかった。しかし、エレベーターから出たその空間は、四方がガラス張りになっており、そこはカウンターを含めて、どこにもつながっておらず、行き止まりだった。そのため、私はもう一度下に降りようとした。

すると、後ろから空港で勤務しているらしき小柄な外国人が声を掛けて来た。その瞬間、私はかなり驚いた。というのも、そこは四方がガラス張りになっていて、扉などなく、いったい彼はどこから現れたのだろうかと思ったからである。そうした驚きはあったが、特にその点について気にすることもなく、空港内で迷っていて、搭乗口に早く行く必要があるということを彼に伝えた。すると彼は親切にも搭乗口への行き方を教えてくれた。どうやらまずは1階ではなく、地下1階に行く必要があるとのことだった。そこからフロアをぐるりと回れば搭乗口に辿り着けると教えてもらい、安堵感が生まれた。

地下1階に到着し、エレベーターの扉が開くと、目の前はアイスクリーム屋だった。そこで日本人の見知らぬ女の子2人がアイスクリームを食べていた。すると、一緒にエレベーターを降りた係員の男性が、「向こうの方に軽食を買える店がありますよ」と述べ、彼はその店の方に向かって歩き、店員に注文をして、1ユーロほどの安い菓子パンを紙袋に入れてすぐにこちらに戻って来た。アイスクリームにせよ菓子パンにせよ、正直なところ、「ろくなものが売られてないな」と私は思った。彼は「何も買わなくて大丈夫ですか？」と親切に尋ねてくれ、「大丈夫です」と私は答えた。

その場を後にする前に、コーヒーか何かを購入しておこうかと思ったところ、アイスクリームを食べている2人の女の子のテーブルの近くに、飲み放題の機械があり、1人の女の子がその機械に近づいて、飲み物をコップに注いでいた。見るとそれは熱湯のようであり、熱湯しか飲み物が出ない機械のようだった。そこで私は、「そういえば、3階のフロアにマルタ航空のラウンジがあったな」と思い、そこでならばコーヒーが飲めると思った。しかし、そこでのコーヒーの質と種類に疑問を持ち、さらにはラウンジであるにもかかわらず、支払いをしなければならないと思われたため、私はコーヒーを飲むことをやめた。

そのような考え事をしていると、先ほどまで隣にいた係員の男性はいなくなっていた。そこから私は、すぐさまそのフロアをぐるりと回って搭乗口に向かった。とは言え、そのフロアもまた複雑な作りをしており、ぐるりと回るだけでも大変だった。ようやくの思いで反対側までやってくると、搭乗口の前に並べられた椅子の一つに見覚えのある顔を見つけた。

見ると、私が以前働いていた塾を経営している副社長だった。そして副社長の前には、見知らぬ女性が座っていて、その女性はこれから講師として働くことになっている方のようだった。副社長に挨拶をすると、ボーディングパスを渡された。そこで私は初めて、今まで自分がまだチケットを持っていなかったことを知ったのである。副社長からチケットを受け取って気づいたことはそれだけではなく、どうやら自分は再度その塾で働くことになっているようだった。

出発の時間が迫って来てはいたが、もう搭乗口前にいるので安心だと思い、副社長と少しばかり話をすることにした。すると、以前お世話になっていたエリアの校長が牡蠣にあたり、食あたりで大変だったという話を聞いた。私もかつて牡蠣にあたったことがあるので、その辛さを知っており、校長先生に同情した。

しばらく話をしていると、いよいよ搭乗時間となり、ゲートを潜ると、なんとそこは飛行機とはつながっておらず、滑走路とつながっていて、飛行機は遥か遠くにあった。そのため、飛行機まではシャトルバスを使って移動する必要があるらしく、私は何台か止まっているうちの1つのバスに乗ろうとした。

そこでもう一度自分のボーディングパスを確認すると、なぜか副社長のボーディングパスも私の手元であり、副社長は間違えて彼の分のチケットまで渡してしまったのだと思った。それがなければ副

社長は飛行機に乗ることができないとわかっていながらも、もう時間がなかったので、私は副社長のチケットを持ったまま、近くのバンのような小さなバスに乗り込んだ。自分のチケットを確認すると、座席番号は6、アルファベットは何も付されていなかった。フローニンゲン:2020/2/12(水)06:46

5537. 無意識の世界の扉と過去未来の世界

時刻は午後7時半を迎えた。今雨は止んでおり、強風も吹いていない。穏やかな夜である。

今日の夕方、夕日に照らされた雨を眺めていた。それは夕日で美しく輝いていて、無意識にその美しさにぼんやりと見入っていた。

今日も雑多なことを色々と考えていた。この世界に対して幾分うがった見方をしている自分いることに気づいたり、この世界の良さを手放しで賛美するような自分いることに気づいたり、そして両者の自分の間をまるでシーソーゲームのように往還している自分いることに気づいたりしていた。

この世界とは一体何なのだろうか。そしてそこに存在しているこの自分とは。無意識の世界の探究は続く。そしてその探究度合いは増していく。

無意識の世界に貯蔵されている無尽蔵なリソースの活用に向けて探究を進めている自分いる。無意識の世界へのアクセスは今のところ夢以外には、この身体を通じてである。身体と無意識は直結しており、身体へ介入することによって無意識の世界に参入していくことができる。身体は無意識の世界の扉であったか。そのような気づきを本日改めて得ていた。

とにかく身体意識へ意識を集中させている時間がここ最近は多い。日常動作を何気なく行うのではなく、そこにもう無意識の世界への扉が隠されているのだから、そこを起点にして無意識の世界に入っていこうとしている自分いる。

現在、細かなものを含めれば、本当に数限りない実践をしている。以前から何げなく行うことがあったが、例えば、夜就寝前に書斎から寝室までの真っ暗な世界の中を、目をつぶったままで障害物に当たることなくベッドまで辿り着くということなどは一例である。今夜もそれをやってみよう。

多くの人が心身の不調に対する予防を行えるようにし、本来持っている自然治癒力の調整と涵養を行えるような知見を共有していくこと、及び一人一人がそうした知見を身近の誰かに共有していく流れに関与していくこと。心身が不調に陥るような文化や社会システムに関与していくことも重要でありながらも、そうした大掛かりな関与の前に、まずは自分にできる小さなことから始めていくという意思を改めて明確に持った。心身の健康と意識の発達に関する大きな学習共同体の一員としての役割を担っていこうと思う。

何を今更と言われるかもしれないが、人は変われるのだということを実感する出来事が今日あった。現在進行中の協働プロジェクトに午前中に従事している時にそれを思った。また、人間存在に対する見方が少しばかり変化した。人は本当に幾つになっても変われるらしい。私たちは変わり続けていく生き物なのだから、それは当たり前だと言われるかもしれないが、質的な変化をこの目で目の当たりにし、それを強く実感すると、人が変われるということの尊さに打たれるものがある。ここから私たちはどのように変わっていくのだろうか。そしてこの社会はどのように変わっていくのだろうか。

2020年を迎えたこの現代において、私は時に数百年前の日本や欧州の姿に思いを馳せることがある。そして、今から数百年後や数千年後の地球に思いを馳せることがある。仮に地球がその時まで存続していたら、数百年後の世界は現在の私たちの世界の出来事をどのように見るのだろうか。野蛮なもの、洗練されたもの、数百年後の世界の人たちは、きっと私たちの今の世界の諸々の物事に対して色々と言いたいことがあるだろう。フローニンゲン:2020/2/12(水)20:03

5538. 時間と可能世界

時刻は午前6時を迎えた。気がつけば今週も終わりに近づいている。平日や休日の境なく、日々が連続的なものとして続いている。曜日としての離散的な区切りは確かにあるが、体感覚として日々の時間は連続しているように感じる。この連続的な流れはどこまで続いていくのだろうか。そして、一人の個人の内側にあるこの連続的な流れはどこに向かっているのだろうか。

ちょうど先日、イギリスから“The Oxford Handbook of Philosophy of Time”という書籍が届いた。この書籍はタイトルにあるように、時間をテーマとしたものであり、時間に関する現代の哲学的研究動向を把握するにはうってつけの書籍である。これを近々読もうと思う。

内的・外的時間に対する関心と同様に、言語で構築された内的宇宙と、身体感覚を通じて把握される内的宇宙への関心もある。言語で構築された内的宇宙に関して言えば、遅ればせながらソール・クリプキの”Naming and Necessity”購入し、そして言語で構築されていく無数の可能世界について探究するために、可能世界論に関する哲学書も何冊か購入し、今手元にある。それらを読むこともまた楽しみだ。

様々な科学領域や哲学領域の研究成果を応用して、概念や理論から様々な実践技法を作り、それを自分に対して適用する日々が続く。これは昔から無意識的に行っていたことなのだが、今はそれを意識的に行っている。概念や理論から自分独自の実践技法を組み立てるところから意識的に取り組んでいる。例えば、上記の時間に関する哲学的な探究に関しても、それをお勉強で終わらせてしまっていては何の意味もなく、いかように時と向き合っていくか、そして時の密度や様相を変化させる実践技法を作っていく。可能世界に関しても同様である。言語で構築されていく可能世界は、その言語の使用いかんによっていかようにも構築及び改変が可能なのだから。

こうした形で実践技法を作り、自らに試すことに並行して、時折そうした技法の中でも有用そうなものは身近な人に紹介もしたりしている。明示的・非明示的問わず、それを伝えることは今後も続けていこう。

今日はどのような1日になるだろうか。昨日と同様に充実した1日になることは間違い無いだろう。そして、今日もまた新たな発見と、生きる喜びの新たな様相が見えてくるに違いない。そのようにして自己と人生が深まっていく。フローニンゲン:2020/2/13(木)06:21

5539. 今朝方の夢

昨日は、その日の朝に見た夢について随分と多くのことを書き留めていたように思う。一夜を明けた今においても、昨日の夢の情景は鮮明である。夢を記録していくことを続ければ続けるほど、夢の情景が鮮明になるだけではなく、その記憶も長く保持されるようになるのかもしれない。このようにして保持された夢を頼りに、無意識の世界の探究を進めていこう。

今朝方もまたいくつか夢を見ていた。夢の中で私は、ある一軒家の中にいた。どうやら私は目覚めたてのようであり、洗面所に行って顔を洗い、何か飲み物を飲もうと思った。部屋を出ると、そこはリ

ビングルームとつながっていて、部屋の片隅に置かれたデスクに、私がジョン・エフ・ケネディ大学時代にルームシェアをしていたルームメイトのスコットがいた。彼はコンピューター・エンジニアであり、銀行の決済システムの構築などを手掛けていた。スコットに朝の挨拶を試してみたものの、彼はパソコンと睨めっこをしていて、返事がなかった。それを気にすることなく私は冷蔵庫から、昨日作ったコーヒーを取り出し、それをレンジに入れた。

レンジでコーヒーが温められるのを待っている間にトイレに行った。トイレに入ると、どうやらスコットがトイレ掃除をしていたらしい。とても綺麗なトイレを見てそう思った。そして、私は一度もトイレ掃除をしたことがなく、いつもスコットに掃除を任せていることに気づき、今度は自分が掃除しようと思った。トイレから出て洗面所の鏡を見た瞬間に夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は薄暗い室内にいた。見るとそこは、高校の体育館のようであり、照明が落とされていた。その代わりに、ステージには眩しいばかりの照明が当たっていて、そこで学生たちが2人1組で漫才を披露していた。

ある1組の漫才が終わり、次の1組が出て来て、彼らは私の友人だった。彼らは、保険に関するなかなか凝った漫才をし、私は大いに笑った。厳密には、外面としてはクスクスとした笑いに抑えていたが、心の中ではかなり笑っていたのである。

漫才が終わると、体育館が明るくなり、今漫才を終えた友人と出会ったので彼と話を始めた。すると、横から見知らぬ学生がやって来て、よくよく彼の顔を見ると、先ほど誰かと組んで漫才をしていた人だということがわかった。彼の顔は知っていたのだが、名前を覚えておらず、彼に名前を尋ねた。そこから私たちは3人で少し雑談をしていると、その名前の知らなかった彼が、「で、いつから向こうに引っ越す？」と友人に尋ねた。

最初私は何のことかわからなかったが、東京出身の友人は東京に戻りたがっているらしく、東京の郊外に土地を購入したらしい。彼は、「土地を中古で購入した」と述べていたが、それを聞いた時、土地に古いも新しいもあるのか疑問に思った。日本の不動産に関する法律に疎い自分がいることをそこで感じた。彼らの話を聞いていると、不思議と彼がどのような場所に土地を購入したのかのイメージができ、そしてなんと、彼が今後建築する家の情景までもがはっきりと見えて来たのである。

現在に関する遠視を超えて、未来に関する遠視も可能なのかもしれないと思わせてくれる体験だった。

次の夢の場面では、私は見知らぬ女性社長の豪邸の中にいた。その社長とはどこかで知り合いになり、彼女はその家で旦那さんと暮らしている。どうやら私は日本に一時帰国中のようであり、数日間ほど社長の家にお世話になることになっていた。そこに宿泊していたのは私だけではなく、大学時代のドイツ人の親友も同じく宿泊しており、彼と朝顔を合わせた。

ちょうど女性社長が出勤する時間だったので、私たちは彼女を見送った。車庫から車が凄いい勢いで外に飛び出して行き、私は一瞬「大丈夫か?」と思い、社長が無事に会社につけることを祈った。ドイツ人の親友と社長を見送った後、私たちは豪邸内の部屋のどこかでゆっくり話をしようということになった。途中、ある一室で社長の旦那さんが黙って黙々とパソコンを打って仕事をしている姿が目に入った。私たちは彼に声をかけることなく通り過ぎていった。

そう言えば、リビングルームから車庫まで社長と一緒に歩いている時に、ドイツ人の親友のプレゼンス(存在感)の大きさについて話題となった。そのようなプレゼンスをどのように獲得・涵養しているのかが話の中心テーマだった。どうやら彼もどのようにそれを獲得・涵養したのかわかっていないようだった。そのようなやり取りがあったのを覚えている。

そこから場面が少し変化し、親友と私は、大学キャンパスと街が融合したような場所にいた。遠くの方に、これまた大学時代に知り合ったフランス人の友人がいて、私たちは遠くから彼に声を掛けて手を振った。すると彼はすぐに私たちに気づき、手を振りながらこちらに向かって来た。そこでしばらく立ち話をしていると、大学時代の女性友達(MI)が私に気づき、声をかけて来た。私は久しぶりの再会を喜んだ。彼女は気を遣ってか、あるいは少し用事があったらしく、もしこの後時間があつたらカフェかどこかで話がしたいとのことであり、携帯に連絡をしてとお願いをして、大学の講義棟の方に向かっていった。

ドイツ人とフランス人の友人たちと一緒に、私たちはフランス人の友人の知り合いが経営しているレストランに向かった。立ち話を随分としていたので、レストランに向かう頃はもう授業も終わっている頃だと思い、彼女の携帯に連絡しようとした。すると、私はもう数ヶ月以上も携帯を使っていないこと

に気づき、何よりも携帯を通じて日本語でメールやメッセージの文章を打てなくするために、日本語の文字入力システムを削除していることを思い出したのである。正直なところ、メッセージを打つことは少々面倒であり、メッセージの入力欄は空白のまま、件名部分に「Jyugyou owatta? Ima, cafeniimasu (授業終わった? 今、カフェにいます)」と打ち込んで送信をした。もし彼女から「どこの店?」と返信があったら、メッセージを入力するという面倒なことはせず、電話をしようと思い、そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2020/2/13(木)06:57

5540. 幾何学と作曲

時刻は午前4時半を迎えようとしている。今朝は、午前3時半過ぎに起床した。いつもながら、目覚めと共に心身の調子の良さを実感した。

ここ最近では意識状態や脳の状態に関する書籍を読み進めることに並行して、身体心理学関係の書籍も読み進めていた。改めて、私たちの身体は、その人の内外のリアリティを映し出していることを思う。身体の動きや状態を眺めれば、その人の内外のリアリティが随分と見えてくる。それは自分に対しても同様である。

”everybody”という言葉に“body”という単語が入っていることの不思議さについて昨日考えていた。これと言って何かわかったわけではないが、この言葉はやはり身体の重要性を強調するような言葉かと思う。

昨夜、一つ一つの曲は、その瞬間の音楽的ゲシュタルトを表していることに他ならないことについて考えていた。一つの曲を作ろうとする時、そこに音楽的な構築物を生み出そうとする力が確かに働いていて、その力に身を委ねる形で曲が形作られていく。もちろん、その力は作曲に関する知識と技術によって高度化する類のものである。今後より一層曲作りに励んでいけば、いつかそうしたゲシュタルトを生む力そのものが一つ上の次元に移行するだろう。それがまさに能力そして知性の発達である。

そこから私は、就寝前にベッドの上で横たわりながら、少なくとも数万曲、できれば10万曲や100万曲ほど短い曲を作って行きたいと思っていた。さすがに100万曲をこの人生の間に作ることは難しいが、それに匹敵するぐらいの膨大な音楽的構築物を自分の内側に作っていこうと思う。

先日届けられた“The Geometry of Musical Rhythm: What Makes a “Good” Rhythm Good?”と“A Geometry of Music: Harmony and Counterpoint in the Extended Common Practice”という書籍を、昨夜就寝前にパラパラと眺めていた。すると、作曲に関するいくつかのアイデアが湧いて来た。そのうちのひとつとしては、まさに本書の主題である幾何学を活用する形で曲を作っていこうというものである。具体的には、例えば円を描き、12音を時計の針に対応させるように配置していく。そこから各音の点を結ぶ形で六芒星を描いたり、正方形を描いたりする形で音を抽出し、抽出された音を使って曲を作っていくというものである。

もちろん、楽譜上に幾何学模様を表現することも可能だと思われ、例えばシューベルトは、通称「シューベルト三角形」と呼ばれる幾何学構造を曲の中で活用している。しかし、こうした目に言える形で幾何学構造を表出させるよりも、目には見えない音楽空間内に幾何学構造を構築していくことの方が興味深い。このアイデアを実際に試してみようと思ったため、就寝前に作曲ノートに円を描き、本日の作曲の下準備をしておいた。本日上記のアイデアを実際に適用してみて、今後はよりそのアイデアを洗練させていこう。

音楽空間上に幾何学的構築物を創造していくというのは、音楽空間内にゲシュタルト構造を作っていくこととほぼ同義である。上述の2冊の書籍はどちらも秀逸であり、こうした良書はアイデアの宝庫であり、創造活動の優れた刺激剤であると実感した。

今日も旺盛な読書をしていこうと思う。それが探究と自らの取り組みを深めていく。フローニンゲン：
2020/2/14(金)04:47